

【講評】

（社会科の学習について*）

矢口 新

（国立教育研究所）

社会科を、何か社会についてのイデオロギ―を与えるものだと考えるのはあやまりである。右むきであろうが、左むきであろうが、そういう考え方は十九世紀的である。社会科は本質的に社会を見る能力をつける教科である。歴史であろうが、地理であろうが、みなそのためにやるのである。自分で見て、整理して、科学的に秩序をつけて考えることができるようになるのが目的である。歴史も地理もその一つの見方である。社会科は、社会の科学の見方の訓練をする教科だと考えるべきである。

社会科では、実証的ということは忘れてはならない。ものを見てゆくときに、論理的にやることを忘れてはならない。多くの社会科

の指導が、いかげんな思いつきの話し合いでやられたり、ことばだけで実証的なものがなかつたりするのは、教師の間に真の科学的精神が欠如しているのである。実証的、論理的であることに、もつと神経質になつてほし

いものである。子供とおとなの認識が異なるなどということがよく言われるが、どこがどう異なるのか、はつきりしないのである。論理に二つはないのであつて、子供だろうがおとなだろうが、正しい認識は一つしかない。子供は経験がないから、おとなの言うことがわからないということがあるとするれば、それは経験を与えればよいのである。あまり、子供子供と特別扱いにするのはよくない。子供を特殊というように考えないで、経験のすくない結果だと考え、いかにして、その経験を積みあげるか考えた方が生産的である。そのことが具体的なものによつて教育するということというのである。具体的、実証的ということとは、その意味でもたいせつなのである。

八代平野の干拓という単元は、具体的な八代平野の干拓の事実を材料として、社会と自

然との関係、つまり自然がいかなる影響を与えるか、人間がいかにそれに対して対抗するか、その場合の人間の社会の動きはどうであつたかなど、つまり社会（都築町という地域社会）のすがたをとらえようとする訓練をする単元だと考えられる。都築町という社会のことをいろいろとおぼえたり、知つたりすることではなく、しらべ、考えてゆくプロセスで、社会の見方を訓練するのである。どう考えるか、そこに、さまざまな角度からの分析がなされるはずである。なぜに工事が社会の人々によつて考えられたのか、あるいは妨害されたのか、その事実を明らかにすることによつて、ある時代のある社会の人々の考え方がわかるであろう。そういう論理的追及をしなくてはならない。いつごろ、だが、どうして、どういう経過をとつたかというよう

な追及の仕方は、構造的にならせず、平板にするおそれがある。ただ一つの問題点でもよ

いから、その筋を深く突っ込んで考えるのが、はつきりさせることになる。

*（一）内のタイトルは、内容がわかるようにするために、ライブラリ編集部がつけたもの。

矢口新ライブラリー 04360 講評（社会科の学習について）